氏名・（本籍）	山 川 正 信（大阪府）
学 位 の 種 類	医学博士
学 位 記 番 号	論医博第77号
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位授与年月日	平成3年3月23日
学位論文題目	**女性の飲酒に関する疫学的研究**
審 査 委 員	主査 教授 龍 野 嘉 紹
	副査 教授 上 島 弘 嗣
	副査 教授 渡 部 真 也

論 文 内 容 要 旨

〔目 的〕

近年、飲酒習慣は成人病発症の危険因子の一つとして注目されている。また、女性飲酒者が急増していることから、女性飲酒の促進要因を把握することは、アルコール症のみならず成人病予防対策を図る上で必要である。本研究は女性飲酒の実態を明らかにするとともに、飲酒意識やライフイベントの経験の仕方から、女性飲酒の促進要因について考察することを目的に行った。

〔方 法〕

1．情報の収集：草津市有権者名簿から、30歳以上70歳未満の女性4,105名を年齢別に比例抽出（抽出率19％）し、郵送法による飲酒調査を昭和62年7月に行った。調査内容は、属性、現在および飲酒開始時の飲酒状況、飲まない理由、飲酒意識、および高校卒業から現在に至る各ライフイベントの経験の有無とそれを契機とした飲酒頻度の変化である。有効回答1,650（有効回答率41％）について解析した。

2．量頻度指標（ＱＦＩ）：飲酒頻度と1回飲酒量から年間の純アルコール消費量PACを求め、対数正規分布で等間隔となるように5段階（ＱＦＩ１；PACO. 3ℓ未満からＱＦＩ５；PAC 10ℓ以上）に区分して、飲酒量の指標とした。

3．因子分析：飲酒に関する意識と飲酒量の関係から促進要因を検討するために、20項目の飲酒意識の反応について直接バリマックス法による因子分析を行い、ＱＦＩとの関係をみた。

〔考　察〕

1．飲酒様態：草津市女性の飲酒率65％は従来の全国調査の結果よりも有意に高く（P≦0.01)、特に30～40歳代の常勤者の飲酒率が高かった。年齢補正をした職業別の飲酒率を比較すると、常勤者の飲酒率は主婦より高かったが（P＜0.01)、常勤者以外の有職者の飲酒率は主婦と変わらなかった。1回飲酒量では、3合未満の者が99％を占めていた。ＱＦＩの累積確率から求めた女性飲酒量の中央値は約0.55ℓで、これは日本人全体で推計される値（4.8ℓ）を大きく下回っていた。このことから、アルコール消費量と飲酒率に基づいて推計されている現在のわが国のアルコール依存症者数は、男性では過小に、女性では過大に推計されていることが明らかとなった。また、現在飲んでいない者の非飲酒理由では、Flashing反応など体質的な理由を挙げる者が過半数を占めていたことから、これらの女性が飲酒するようになったとしても、その飲酒量は少なく、単純に飲酒率の増加に比例して大量飲酒者が増加するとはいえない。しかし、女性の社会進出や女性飲酒に対する社会規範の緩和によって、今後、女性の飲酒率のみならず飲酒量も増大していく可能性が考えられる。

2．飲酒意識：20項目の飲酒に関する意見の反応は因子分析の結果、『価値意識』『方法意識』、『規制意識』および『有害意識』の4つに集約された。それぞれの意識の程度（スコア）とＱＦＩの関係から、価値意識は飲酒を促進する最大の要因であり、規制意識は飲酒量に関係しないこと、そして、方法意識や有害意識は飲酒を抑制し、適正な飲み方を促進することが明らかとなった。

3．ライフイベント（ＬＥ）の経験と飲酒機会の変化：飲酒を開始した者の割合は就職、進学、卒業、社会活動参加、結婚、夫の単身赴任や再就職の順に高かった。また、飲酒機会が増加した者の割合は、家庭の不和、社会活動、夫との離別や死別、就職、結婚の順に高かった。つまり、これらのＬＥは飲酒を促進させやすい要因と考えられる。一方、飲酒機会が減少した者の割合は退職、大病、妊娠・出産、結婚等の順に多く、これらは飲酒を抑制する要因と考えられる。結婚は促進と抑制の性格を有していた。このように、それぞれのＬＥには促進と抑制の性格が考えられ、一般に女性アルコール症者には、両親や夫あるいは子供の死などの不幸な経験をした者が多いと言われているが、ＬＥそのものがそのような性格を有するか否かは明らかにされていない。Flashing反応や精神的、心理的要因など飲酒者側の宿主要因も飲酒量と関係していることが考えられ、今後の検討が必要である。

〔結　論〕

以上の検討の結果、1）量頻度指標（ＱＦＩ）からみた飲酒量の分布には、依然として著しい男女差が認められた。2）女性の飲酒量は飲酒の動機や飲酒相手、飲酒場所ならびに飲酒に対する意識の違いで大きく異なるが、近年の女性の社会進出や社会的規範の緩和を背景として飲酒率や飲酒様態に性差はなくなりつつあると考えられた。3）女性の飲酒量は母親の飲酒習慣と関係があり、習慣的飲酒をする母親をもつ女性の飲酒量が多かった。4）ライフイベントにはそれぞ

れ飲酒を促進する性格と抑制する性格があり、家庭の不和、就職、進学、社会活動などは促進し、逆に、退職、大病、妊娠・出産などは飲酒を抑制する性格を有するが、結婚は促進と抑制の両方の性格を有しており、女性の社会進出が飲酒を促進していることが明らかとなった。5）女性に特有の出産や育児からの解放は、飲酒を促進させやすいライフイベントであることが明らかとなったが、これらのライフイベントそのものがそのような性格を有するか否かについては、飲酒量の多少とそれぞれのライフイベントの経験者率や増加者率の違いについて検討する必要がある。

学位論文審査の結果の要旨

本研究は、近年、女性飲酒者が増加していることから、女性の飲酒様態を把握し飲酒意識やライフイベントと飲酒量との関係から女性の飲酒の促進要因と抑制要因を検討したものである。

草津市有権者名簿から30歳以上の女性4,105名（対象女性の約19％）を年齢階層別に比例抽出し、郵送法による飲酒調査を行い、1,650の有効回答を得た。

学位論文は2編に分かれている。その1「女性の飲酒様態について」の結果では、草津市女性の飲酒率は64.7％と他の調査に比して高く、年齢別には30歳代が72.5％と最も高かった。有職者の飲酒率は主婦の飲酒率よりも有意に高かった。母親が習慣的飲酒者の場合の飲酒率は84％と高かった。飲酒頻度については、全体の半数以上が月1回未満の飲酒者であった。また、その1回飲酒量は日本酒に換算して1合未満のものが75％、3合未満のものが99％であり、飲酒量は少なかった。多量飲酒者は0.2％で、従来いわれている推定値2.5％より大幅に低かった。女性飲酒者の約4割は未成年で飲酒を始め、若い年齢層ほど初飲年齢が低かった。非飲酒者の飲まない理由は、体質的というのが過半数で、単に飲む機会のなかった潜在的飲酒者も4割弱見られた。その2「意識態度およびライフサイクルについて」においては、女性の飲酒に対する意識を多変量解析により分析し、価値、方法、規制、有害の4つの要素を抽出した。これらの要素と現在飲酒量との関係を検討した結果、価値意識は促進効果を、有害意識は抑制効果を有し、方法意識は適正飲酒と関連していた。規制意識は女性に共通して見られた。進学、就職、社会活動、離婚、再就職などは飲酒を促進し、退職、出産、病気は飲酒を抑制すると考えられた。また、結婚は促進的にも抑制的にも働くと考えられた。

以上の研究は、多数の女性の飲酒様態を明らかにし、女性の飲酒の促進要因、抑制要因とライフイベントとの関係を検討した疫学的研究であり、学位論文に値するものと認められた。